

【実践報告】

「教育実習Ⅰ（小学校）」の報告

広島文教大学教育学部教育学科

准教授 三 田 幸 司

1 はじめに

本科目は、小学校における本実習（教育実習Ⅱ・Ⅲ）に臨む学生に対して、実習生としての確かな心構えと教育実践力を養うことを目標とする。まず全体会において、前年度までに履修した「児童の理解」、「学校教育の体験活動（小）」等における観察・参加実習での体験や、各教科教育法での学修内容を振り返り、教材研究や学習指導案作成の仕方などをより深く学ぶ中で、事前に取り組むべきことを明確にしておく。その後は、グループに分かれて教材研究・題材開発、模擬授業・事後協議に取り組む。また、空きコマなどを活用して、指導案等について担当教員から指導を受けたり、学生同士で模擬授業の練習を行ったりする。最後に、全体研究授業（代表学生による模擬授業）と協議会を実施するとともに、全体会を行って後期の教育実習Ⅱ・Ⅲへとつないでいく。

2 実施のスケジュール

項目	時期	主な内容
事前ガイダンス、全体会Ⅰ・Ⅱ	1月～4月	<ul style="list-style-type: none">・2年次後期の1月下旬又は2月初旬（今年度は1/24）に事前ガイダンスを行い、教育実習Ⅰの趣旨・スケジュールや春期休業中の課題などを確認し、グループメンバー及びグループ毎の目標を決定する。・担当教員からのアドバイス（教材研究のポイント、教科書・指導書などの資料の活用法、指導案の提出・添削の方法など）、春期休業中の課題の提出、第1クール担当教員と模擬授業の打ち合わせなどを行う。・担当教員による示範授業と協議会を体験するとともに、今後の取組についての打ち合わせをグループ毎に行う。・ループリック（授業評価票）を配付し、評価規準（基準）、評価方法について担当教員から説明する。
グループ別模擬授業	4月～7月	<ul style="list-style-type: none">・教材研究や題材開発に取り組み、学習指導案を作成する。担当教員と模擬授業に関する事前打ち合わせを行う。模擬授業をするにあたり、事前に模擬授業の練習を自主的に行う。・グループ毎に模擬授業と事後協議に取り組む。
全体研究授業Ⅰ・Ⅱ、全体会Ⅲ、事後学修	7月～9月	<ul style="list-style-type: none">・代表者による模擬授業（模擬授業45分間×2・研究協議会40分間）を行う。・担当教員による激励、教育実習Ⅰの振り返り、課題（学習指導案のデータ・プリント、自己評価シートなど）の提出をする。・夏期休業中、グループ別で模擬授業に自主的に取り組み、後期の教育実習Ⅱ・Ⅲに備える。

3 活動の概要

(1) グループ及び担当授業科目（受講者総数95名）

昨年度は受講者総数が80名を超えたが、今年度は更に増加して95名となった。前後の指導や1回の授業時間を考慮すれば、模擬授業は各回3本、全10回が理想である。担当教員数が9名であったことから、学生のグループを一つ増やしてAからIまでの九つにしたが、それでも11名のグループが五つできることから、模擬授業の回数も1回増やして11回にした。

グループ (人数)	模擬 ①	模擬 ②	模擬 ③	模擬 ④	模擬 ⑤	模擬 ⑥	模擬 ⑦	模擬 ⑧	模擬 ⑨	模擬 ⑩	模擬 ⑪
A (11名)	国 語			体 育			社 会			図画工作	
B (11名)	体 育			社 会			図画工作			算 数	
C (11名)	社 会			図画工作			算 数			音 楽	
D (11名)	図画工作			算 数			音 楽			英 語	
E (11名)	算 数			音 楽			英 語			道 徳	
F (10名)	音 楽			英 語			道 徳			理 科	
G (10名)	英 語			道 徳			理 科			国 語	
H (10名)	道 徳			理 科			国 語			体 育	
I (10名)	理 科			国 語			体 育			社 会	

以前は、模擬授業は第3回からスタートしていたが、本格的な指導が始まる全体会Ⅰから模擬授業開始まで2週間しかなく、学生の授業準備や教員の指導を充分に行うことが難しいため、2022年度は第1回から第3回までを全体会として授業づくり等についての指導を充実させ、模擬授業をゴールデンウィーク明けの第4回から行った。しかし今年度は、模擬授業回数を11回に増やしたことで、第3回から模擬授業を開始する計画に戻した。

2021年度（当初の予定）	2022年度	2023年度
(1) 4/17：全体会Ⅰ	(1) 4/14：全体会Ⅰ	(1) 4/13：全体会Ⅰ
(2) 4/22：全体会Ⅱ	(2) 4/21：全体会Ⅱ	(2) 4/20：全体会Ⅱ
(3) 4/29：模擬授業①	(3) 4/28：全体会Ⅲ	(3) 4/27：模擬授業①
(4) 5/ 6：模擬授業②	(4) 5/12：模擬授業①	(4) 5/11：模擬授業②
(5) 5/13：模擬授業③	(5) 5/19：模擬授業②	(5) 5/25：模擬授業③
(6) 5/20：模擬授業④	(6) 5/26：模擬授業③	(6) 6/ 1：模擬授業④
(7) 5/27：模擬授業⑤	(7) 6/ 2：模擬授業④	(7) 6/ 8：模擬授業⑤
(8) 6/ 3：模擬授業⑥	(8) 6/ 9：模擬授業⑤	(8) 6/15：模擬授業⑥
(9) 6/10：模擬授業⑦	(9) 6/16：模擬授業⑥	(9) 6/22：模擬授業⑦
(10) 6/17：全体会Ⅲ	(10) 6/23：模擬授業⑦	(10) 6/29：模擬授業⑧
(11) 6/24：模擬授業⑧	(11) 6/30：模擬授業⑧	(11) 7/6：模擬授業⑨
(12) 7/ 1：模擬授業⑨	(12) 7/ 7：模擬授業⑨	(12) 7/13：模擬授業⑩
(13) 7/ 8：模擬授業⑩	(13) 7/14：模擬授業⑩	(13) 7/20：模擬授業⑪
(14) 7/15：全体研究授業	(14) 7/21：全体研究授業	(14) 7/27：全体研究授業
(15) 7/29：全体会Ⅳ	(15) 7/28：全体会Ⅳ	(15) 8/ 3：全体会Ⅲ

なお、事前ガイダンス後になって体育の模擬授業が実施できなくなったことが分かり、体育を選んでいた学生については急遽教科を選び直させ、他グループにおいて模擬授業を行わせた。

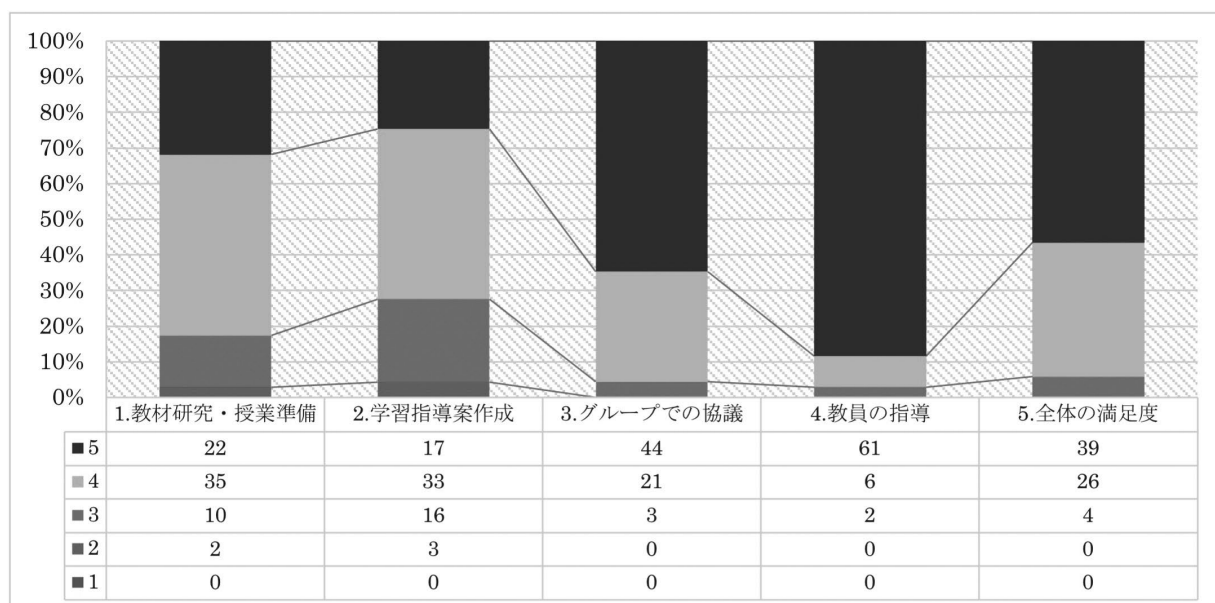
全体研究授業と協議会については、本年度も対面で行うことができた。代表授業者への立候補者が多かったことと、新型コロナウイルス等への感染対策から、五つの会場に分散して行った。

授業・協議会場	模擬授業 1	模擬授業 2
模擬授業室	Dグループ代表 算数	Fグループ代表 音楽
模擬レッスン室Ⅰ	Aグループ代表 道徳	Eグループ代表 社会
模擬レッスン室Ⅱ	Cグループ代表 社会	Gグループ代表 道徳
理科演習室Ⅰ	Hグループ代表 理科	Iグループ代表 理科
理科演習室Ⅱ	Bグループ代表 図画工作	Cグループ代表 図画工作

示範授業での学びの記録と中間振り返りのシートは紙媒体で提出させ、全体振り返りシート（自己評価票）についてはこれまでと同様にGlexaを活用して入力させた。

（２）教育実習Ⅰ：全体振り返りシート（自己評価票）の集計結果（回答者69人、回答率72.3%）

最終講の後に、自己評価票（Glexa）による調査を行った。「1. 教材研究・模擬授業準備」、「2. 学習指導案作成」、「3. グループでの協議」、「4. 担当教員の指導」、「5. 授業全体の満足度」の5観点についての満足度を5段階（5が最高、1が最低）で学生に評価させた。なお、昨年度までは「1. 教材研究・指導案作成」であったが、今年度は模擬授業開始時期が早まったため「1. 教材研究・授業準備」と「2. 学習指導案作成」に分けた。結果はグラフのとおりである。



【令和5年度・教育実習Ⅰ自己評価票 集計結果（A～Iグループ）】

4 成果と課題

広島サミットによる休講や、担当教員1名減に伴う計画変更など、急な変更が重なったものの、今年度も、教員による示範授業や模擬授業の全てを対面で行うことができ、加えて、全体研究授業も実施できた。また、全体研究授業の代表授業者を各グループから選出した際には、1名に絞ることが難しいグループもあったほど学生の積極性が見られた。全体研究授業については、昨年度と同様に教育

実習Ⅰの集大成として行うこととし、授業づくりや準備は各グループ内で協力・分担するように指示すると共に、教科担当教員の指導は必要に応じて受けてもよいことにした。

今年度も、担当教員による学生の評価と学生による自己評価にループリッックを活用した。そして、担当教員による協議の上、最終的に評定を決定した。また、学生による自己評価結果（【令和5年度・教育実習Ⅰ自己評価票 集計結果（A～Iグループ）】参照）を昨年度の結果と比較したところ、最も肯定的な回答である選択肢5の割合が「3. グループでの協議」については約16%,「4. 教員の指導」については、約6%上昇していた。

課題としては、来年度、再来年度も受講者数が90名を超える予定であることがまず挙げられる。今年度は、グループ数を8から9へ増やすことと、10回の模擬授業を11回へ増やすことで対応した。しかし、学生による自己評価結果の「2. 学習指導案作成」の満足度が他よりも低いことと、模擬授業回数を1回増やすために最初の模擬授業がゴールデンウィーク前の第3回に繰り上がったこととの関連を考慮すると、最初の模擬授業のための指導案作成の指示や前期授業開始までの指導案添削等について検討が必要である。次に、これまでは新型コロナウイルス等の感染対策として各教室の人数を減らすために多くの代表授業を行わせてきたが、来年度からは一つの授業を多くの者が参観して協議するスタイルに戻すことも検討する必要がある。その際には、授業開始までに本科目担当教員が集まって、代表授業者の選出方法や授業の教科について検討したり意識統一したりすることが重要であると考ええる。

参考・引用文献

- ・三田幸司「教育実習Ⅰ（小学校）の報告」（『広島文教大学 教職センター年報 2022年 第10号』広島文教大学教職センター，令和4年）
- ・三田幸司「教育実習Ⅰ（小学校）の報告」（『広島文教大学 教職センター年報 2023年 第11号』広島文教大学教職センター，令和5年）